

僕を憎み愛した妻・河野裕子

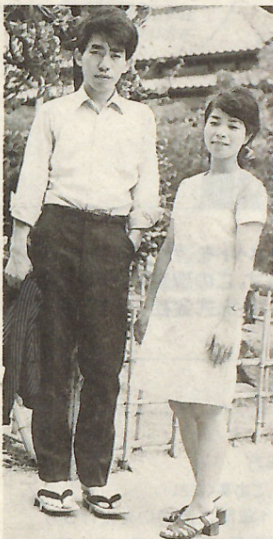
戦後生まれを代表する歌人河野裕子が乳がんで死去して、ちょうど2年。夫で歌人の永田和宏(65)が、壮絶だった河野と家族の闘病生活をつづった手記『歌に私は泣くだらう』(新潮社)と歌集『夏・二〇一〇』(青磁社)を出した。

河野は2000年に手術、8年後に再発転移が分かった。一昨年夏の最後の3週間、手帳に鉛筆で175首を書きつけ、その力もなくなると付き添った家族が口述筆記した。最後の絶唱は永田が聞き取った。

〈手をのべてあなたとあなたに触れたきに息が足りないこの世の息が〉

夫婦愛、家族のきずな、歌人としての見事な最期を多くの人がたたえた。しかし、そこに至るまでには「地獄のような」日々があった。手術後、何年も河野が激しい怒りの発作に見舞われるようになったのだ。

体の不調と再発への不安、以前から常



新婚時代の永田と河野。38年連れ添った

歌人・永田和宏が手記出版

用していた睡眠導入剤の影響もあったのだろう。ささいなきっかけで、延々と何時間も永田をのしり、夜中に包丁を持ち出して迫ったこともあった。絶望した永田は死も考えた。

〈この人を殺してわれも死ぬべしと幾たび思ひ幾たびを泣きし〉

それでも持ちこたえられたのは、河野のこの一首のおかげだった。

〈あの時の壊れたわたしを抱きしめてあなたは泣いた泣くより無くて〉

こんな修羅場を迷いながらも書いたのは、自分に向けられた怒りの理由を考えるためだった。そして分かった。「あの頃、河野は本気でぼくを憎んでいた。憎みながら、誰よりも愛していた。そして一番心配していたのは、置いていくぼくのことだったと」

再発後、河野は驚くほど冷静で、今度は永田が打ちのめされた。思いを伝えるために決心してうたった。

〈歌は遣り歌に私は泣くだらういつか来る日のいつかを怖る〉

「彼女はどんどん澄み切っていく感じがした。苦しんで苦しんで、ようやくたどりついたのが最後まで歌を作り続けること、歌人として生き切ることだった。この人が女房だったことを改めて誇らしく思う」

(伊佐恭子)